

新婚の思い出

室井 綽

昭和七年頃、新婚旅行で花巻温泉を訪れ時だった。

電車の終点から台温泉までの道を歩いていると「あなた、ここにも恋人のササがあるわよ。」と当時、ササの研究をしていた私に新妻が笹藪を指さした。

そのササは今まで見たこともないササであった、さっそくこれを調べたところやはり学会未知の新種であった。

わたしは、発見したこの珍しいササに新妻玲子を記念して、ニポノバンブサ・レイコアナム・ムロイという学名とレイコシノ（玲子笹）とひそかに和名を付けて、新妻を記念して学会に発表した。

その後、多くの在郷の植物学者の協力をえて分布を調べたが、ここ花巻を中心に東部一帯に生育することがわかった。ササ類は一般に分布が広いのに、どうしてこの玲子シノ（笹）だけが狭い岩手の溪谷にだけ自生するのが不思議なことである。ちょうど玲子のも静かな性質と一脈通ずるものがある。とくかく世界広しといえども、このササに限って、岩手のここで見つかっていないのである。

このササを発見し、献名した主人公の玲子は不幸にも昭和二十一年に中耳炎を患って病没したが、玲子シノの方はますます大発展、戦後日本庭園中の石付きとして小形のササが大歓迎されるようになったが、その先駆をうけたまわっているのである。

このササは北日本の寒さで長年鍛えられただけあって耐寒性が強いのと、濃緑なうえに、刈り込むと自由自在に変形してはるかに小形になるので日本庭園中の出色である。日本の名庭園を見学中、または講

演中にまったくあかの他人から玲子シノがよいとか、玲子が最上だなどと呼ばれると多少のしつとがおこらないでもない。
しかし考えてみると死んでなお、名を残したということでは多少とも故人の霊を慰められるかと多少のうぬぼれもわかないではない。
玲子シノの原産地、花巻に娘を道づれに歩き若き日を思い浮かべ、ますます発展する玲子シノ発見の地、ふるさとの姿を再度みて感慨無量なものがある。

（昭和三十七年八月十七日）「ばん茶せん茶選」岩手日報社編

抜粋

レイコ 笹

